# スラム街の吸血鬼

時雨 豊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スラム街の吸血鬼

【Ｎコード】
Ｎ１９０９ＢＡ

【作者名】
時雨　豊

【あらすじ】
マイペースな軍人、フランシス＝フルートは、朝市に出向いた時、ひょんなことから奇妙な少女に出会う。その少女は、この街では厳しく弾圧されている吸血鬼だった。フランシスは、気まぐれか、それとも罪滅ぼしか、その少女を助けることを決めた。

## 物騒な噂

「……ふぁぁ」

朝の騒がしい市場で、大きく欠伸をする。元来、この男は朝が苦手なのだ。だが、そろそろ買いだしに行かないと飢え死にしてしまう。そう思い、この休みに食料を買いに来た。コートの中に、財布が入っているのを確認しながら歩く。最近はこの辺りも物騒な噂しか聞こえてこない。特に、スリ等の盗みが横行しているという話をよく聞く。

喧嘩なら受けて立つが、スリに遭っては敵わない。気付かなかったら金が無くなるし、気付いたら気付いたで軍として取り締まらなければならない。せっかくの休日に軍の仕事をするのは面倒だ。だから、わざわざ軍用のコートを着てまでスリ師を牽制しているのだ。この男は、問題のスリ師を捕まえる気などさらさらない。ただ自分の周りで騒ぎを起こしてほしくないだけだ。

何を買おうかと辺りを見回している時、花を売っている気さくな中年女性から声をかけられた。

「どうしたんだい、フランシス。今日はまた随分物騒な恰好をしてるじゃないか」

「ここらの物騒な噂に合わせてね」

「そうかい。スリの噂はこっちとしても迷惑なんだ。早く捕まえてくださいよ、フルート中尉」

「やめてくれ、気持ち悪い」

彼の名は、フランシス＝フルートという。地位は中尉だ。軍人とは思えぬその俗っぽさとマイペースさから、市民からは密かに支持さ

れている。この中年女性からもだ。

「軍用コートでも着てりゃ、スリ師もさすがに寄ってこねーよ。よかったな、俺がいる間は安心だ」
「なら毎日それ着てうちに来ておくれよ」
「スリ師一人の為にそこまでしてられるか。まあ、そいつに俺からスる度胸があるんなら、捕まえてやるけどな」
「じゃあスられる前に少しでもうちで買っていきな」
「スリに狙われやすいように金をたくさん持っておくよ」
「なんだつまらん。好みの女とかいないのかい？」
「女よりまず命だ。花は食えない」

食料を買いに来たのに花を買ったところで何の得にもなりはしない。フランシスは、言いくるめられる前にさっさとこの場を去ることにした。野菜と肉を売る店を探しに、またフラフラと歩く。

……この辺りは、スラム街の近くだ。スリ師がいるとしたら、スラムのどこか。この辺りで彼が狙われても何らおかしくない。軍人とはいえ、スリなどいろいろな手口がある。決して油断しないよう気をつけながら歩く。

その時、トン、と誰かがぶつかってきた。
ぶつかった、ではない、ぶつかってきた、だ。曲がりなりにも彼は軍人、そのくらいの見分けはつく。

「あっ……ごめんなさい」
「ちょっと待った」

軽く謝って、そそくさと歩き出した者を止める。黒い布を頭まで被っていて、背は小さく子供らしかった。その子供が、彼の方を振り向く。少女だった。顔は怯えていて、明らかに挙動不審だ。
フランシスは、大きく溜息をつく。

参ったな、子供か。
そう誰にも聞こえないよう呟いて、少女に聞こえるように言った。

「……盗んだ金、返しな。今すぐ返すんなら、特別に無かったことにしてやるから」

こんな子供でも、スリをすれば指切りの刑だ。捕まえるのは胸が痛む。だから、軍人としてはあってはならないことだが、条件付きで逃がすことにした。
条件と言っても、盗んだ分の金を返すという至極当然のことだ。こういう子供はスリが見つかったら何をされるかよく分かっている。指を切られることを天秤にかければ、どちらがいいか分かるだろう。

フランシスは、そう踏んでいた。
……だが、甘かった。

「い、いや！」
「なっ？」
咄嗟に、少女は逃げ出した。フランシスは一瞬呆気にとられて動けなかったが、すぐに後を追う。

「おい待て、こら！」

朝の市場となると、人が込み合っている。少女は、その中をスルリと抜けていくのだ。月に数回しかこないフランシスは、この人ごみをかき分けるので精いっぱいだった。通常の道なら間違いなく追いつくだろうが、この人ごみでどんどんと少女から離れて行く。

「このヤロウッ……！　大人ナメんなよこらぁっ！！」

だが、ここでまんまと少女に出し抜かれる訳にはいかない。フランシスは店の屋根によじ登り、そのまま屋根をつたって走り出した。屋根を飛び越え飛び越え、走る。人のいない場を走れば、当然フランシスの方が速い。

「……っ！！」

少女もそれを悟ったのか、咄嗟に路地裏に逃げ込んだ。それに続こうとするが、そこは狭く、フランシスではとても通れそうに無かった。

「まだまだっ！　下で店やってる奴、すまんがちょっと部屋入るぞ！」

こうなってしまっては彼も意地だ。
店の屋根から窓に入り、そのまま向こう側の窓から飛び降りる。そこは、もうスラム街に入っていた。向こう側に比べ、人がほとんどいない。
そんな中、一人だけ走っている姿が見えた。あれだ。走る影を目指して、全身全霊を込めて走る。

「やっと、捕まえた！」
「きゃっ……！」
走っている少女の手を掴む。その反動で倒れかけたのを、慌てて抱きかかえた。

「はぁ……ったく、手間かけさせやがって。何で逃げたんだよ？」
「は、離して！」
「人の話をきけーい」
「いたっ！」
少女の頭を軽く叩く。少女は、涙目になりながらフランシスを睨んだ。胸が痛む。だが、このまま逃がすわけにもいかない。

「で、何で逃げたんだ？」
「見れば、分かるでしょ……！」
「分かるって？」
少女が、黒い布をはぐ。
少女は、長く蒼い髪に、白い肌を持っていた。服は布を体に縛ってあるだけだ。

そして、紅い眼と尖った歯、それに、頬についた逆十字の紋。それが、その少女の存在を決定づけた。
あー、とフランシスは呟く。
この少女は、スラム街の住民というだけでは無かったのだ。

「……見てのとおり、吸血鬼よ」
「なるほど、通りで」

吸血鬼。
この世界に存在する、人間と同等の知性がある唯一の生き物。人間という種類に当てはめてもおかしくはないほど、その姿は人間と酷似している。当たり前だ、吸血鬼とは死んだ人間が蘇ったものなのだから。だがその身体能力は、生前より遥かに高くなると言われている。

見た目は、一見すると普通の人間と変わらないのだが、人間とは違う特徴がいくつかある。
それが、紅い目と尖った歯と、そして頬につく逆十字の紋だ。紅い目や八重歯の人間は吸血鬼以外にも少なからずいるのだが、頬の逆十字の紋は吸血鬼だという紛れもない証拠。この逆十字の紋があるからこそ、吸血鬼は『神に背きし者』として教会から厳しく弾圧されているのだ。

それだけではない。人の多くは吸血鬼を忌み嫌っている。吸血鬼は人の法律にも触れられていないため、吸血鬼に何をしても罪は問われない。むしろ、何もしていない吸血鬼の公開処刑などがざらにあるのだ。なるほど吸血鬼の迫害を今まで見てきたのだろうこの少女が、怯えないわけがない。

「あんた、スった後に気付いたけど、軍人でしょ。どうするの、私を……。教会にでも、連れていくつもり？」

「あー？　どうして軍人が吸血鬼を教会まで送らにゃならんのだ。俺の仕事は国を守ることだ。他種族の弾圧じゃない」
「え……？　じゃあ、許してくれるの？」
「吸血鬼だからってスリを許すわけないだろ。かといって、軍に突きだしたら散々な扱いを受けるだろうしな……」
「じゃあ、私を一体どうするつもりなのよ……」

少女は、その場にへたり込んだ。その顔からは、かなりの疲れが見える。

「お前、疲れてるのか？」
「……さっきまでずっと走ってたんだもん。疲れるでしょ」

「ま、自業自得だな。それにしても、何でスリなんて。吸血鬼が生きるのに必要なのは人の血だけだろ？　なんのための金だ」
「この街で暮らしていくための金よ。スラム街には、もう何人かの吸血鬼がいる。その吸血鬼相手に商売をしてる奴がいるのよ」
「……血を売ってるのか？」
「ええ。騒ぎになるのは嫌だから、私たちスラム街の吸血鬼はそうやって暮らしているの」
「そりゃまた、えらいことを聞いちまったな……」

このことを密告すれば、恐らく二階級は確実に上がるほどの手柄だろう。だが、フランシスは地位にこだわる男ではない。密告など頭の端にもない選択だった。彼女も、それを分かってこのことを話したのだろう。

「他の吸血鬼たちは？　お前と同じでスリをはたらいているのか？」
「ち、違うわ。他のみんなは、採った野草や仕留めた動物で交換しているの。あとは、魔術を使って手伝いをしたり」
魔術も、吸血鬼の大きな特徴だ。どういうわけか分からないが、吸血鬼は魔術を使う。魔術とは、火を出したり、物を浮かせたり、空を飛んだり様々だ。吸血鬼になると、人は『魔力』を得るらしい。その魔力で、魔術を扱うという話だ。

「お前も魔術を使って何かすればいいじゃないか」
「私は……魔術、使えないの」
「は？」
「身体能力も以前のまま。……私が人間と違うのは、外見と血を吸う能力だけよ」
「そりゃまた、いいとこなしだな」
「うぐ……ハッキリ言うわね」
つまり、吸血鬼なのに普通の人間とまったく同じ事しかできないから、スリでもしてお金を稼ぐしかなかったというわけだ。

「も、もういいかしら？　私、そろそろ血を飲まなきゃ、力を失ってしまうのよ」
「もともと身体能力高くないんだろ？」
「だからこそよ。普通の吸血鬼なら、血をある程度飲まなくても普通の人間くらいの力は保てるんだけど、私が血を飲まなかったらもう立っているのがやっとの状態になるの。だから、そうなるともう血なんて吸える状態じゃなくなるし……そうなったら、もう死を待

つしかないのよ」

「へー……デリケートなんだな。だが、俺の金は使わせない」

「ごまかせなかったか……」

「大人ナメんなコラ」

フランシスの財布を持って逃げようとしていたため、再度手を掴む。掴まれた手をなんとか放そうとするが、やはり力は外見相応で、まったく強くない。しばらく放そうとしていたので待ってみたが、やがて諦めたように溜息をついた。

「ねえ、お願い……本当に死活問題なのよ……お願いだから見逃して」

「充分見逃してるっての。本来ならお前、処刑されてるんだぞ？」

「血を飲むことができないなら死刑宣告も同じよ……」

フランシスは、思った。

めんどくせえ。

だがこのスリ吸血少女を黙って見送る訳にもいかない。面倒と思いながらも、方法を考えることにした。

「その、お前の仲間からは分けてもらえないのか？」

「他の仲間だって、分けるほどの血なんて持ってないだろうし」

「じゃー、なんだ。乞食でもしろよ。それなら顔見られないでもできるだろ」

「乞食なんていくらももらえないし、そもそももらえるかどうかも分からないじゃない！」

「はぁ……。じゃあ、このままスリを続けるってのか？　悪いが街の治安を乱される訳にはいかない。もう一度お前を見たときには、即刻軍へ突きださせてもらうが、それでもいいのか？」

冗談ではなかった。

フランシスとて、マイペースでお人好しだが軍人は軍人。法は守らねばならない。これは特別といって一例を許せば、模倣犯がまた現れる。それでは治安が悪くなる一方だ。そうならないためにも、この少女を許すわけにはいかないのだ。

「うっく……じゃ、じゃあどうしろってのよ！　私だって、生きるのに必死なんだから！　人間に見つかったら死ぬって状況で、人からお金盗んで！　必死なのよ！　少しくらい許してくれたっていいじゃない、あんたら人間は豊かなんだから！」

「情に訴えたいなら、まず法を守れ！！」

「っ……！」

「法を守らねば、どんな善人も罪人だ。人は罪人の言い分なんざ聞きたがらない。情けを買いたいってんなら、罪を犯すな」

「だって……しょうがないじゃない、もう……。故郷に帰りたい……普通に暮らしたいよ……」

「……泣くなよ」

「はは、落ちぶれたものよね、吸血鬼も……。気高き貴族なんて言われてた時代もあったのだけど」

黒い布一枚を体に巻いただけの少女は、またしてもへたり込んだ。そして、泣き始めた。いきなり泣かれても、彼にはどうすることも

できない。改めて少女を見ると、服以外はあまり汚れていない。ここへは、最近来たばかりなのだろうか。

「帰る場所があるのか？」

「……ないわ。ほら、私、吸血鬼だから……。人間に見つかっては逃げて、見つかっては逃げてを繰り返してきたの。だから、完璧な定住の地なんてないのよ。ここにも、つい最近来たばかりなの。これならこの前の森の方がよかったわ……。仲間もたくさんいたし、緑はたくさんあったし」

そういえばこの前、また吸血鬼の公開処刑があったのを、フランシスは思い出した。思い出して、また吐き気がした。彼は軍人で、吸血鬼を殺すのも軍人の仕事だと割り切っているのだが、公開処刑というのはどうあっても好きになれない。助けて、助けてと必死に命乞いをする吸血鬼にも胸が痛むし、その首が切り落とされるのを見て盛り上がる人間を見ていると、果たして自分はこちら側にいていいのか甚だ疑問に思えてくる。

……あの処刑された中に、この少女の知り合いもいたのだろうか。

そう思うと、フランシスはまたズキリと胸が痛くなるのを感じた。

……あの時は、吸血鬼が反撃を仕掛けてきたことと、その森がこの街に近かったということから、フランシスも戦いに参加していたのだ。だから、当然たくさんの吸血鬼を殺した。その中にも、当然この少女と親しい者もいたことだろう。

「なあ、まだここに来て間もないだろうが、早めに居場所を移ったらどうだ？　この街は、弾圧が厳しい。……ここにいると危険だぞ」

「人間がこの世界にのさばってる限り、吸血鬼に危険じゃない場所なんて無いわ。人間の協力者がいてくれるだけでも大当たりよ。私に、力ずくで血を吸うような真似は出来ないから」

「……そうか」

改めて、今の吸血鬼の在り様を見ると、憂えずには居られなかった。ここまで吸血鬼の弾圧が厳しいのは、教会と、そして、フランシスら軍の存在が大きい。教会は言わずもがな、逆十字の紋を持つ異教徒として厳しく取り締まっている。

そして、軍の方はというと、数年前に最高位の元帥に即した男が、異様なまでの吸血鬼嫌いなのだ。といっても、何か深い恨みがあるわけでもない。ただ人間という種族にプライドがあり、それ以外の種族を対等に扱うなどあり得ない、とのことだ。

この男の評判は決して良くは無いのだが、吸血鬼は激しく弾圧すべき、という意見だけは一致するという者はたくさんいる。元帥が吸血鬼弾圧を宣言したものだから、数年前から吸血鬼弾圧がより激しくなってしまったのだ。

「他のみんなには迷惑をかけるだろうから、スリはやめるわ。だけど、これからどうやって生きていけばいいの……」

「なあ」

「……何？」

どうしても心の中の罪悪感を拭えず、

彼は、この吸血鬼の少女を助けてやりたくなった。

「だったら、しばらくの間俺の家に住むか？」

「……え？」

少女は、しばらく呆けていた。いや、ずっと固まっていた。

「普通に暮らしたいんだろ？　何一つ不自由なく……ってのは無理な話だが、少なくともスラム街よりは楽な暮らしができるだろ？」

「な、何で？」

「スリ師をこのまま放っておくわけにもいかないからな、軍人として」

というのは、実際のところ口実に近い。

「え……でも、血は？」

「人一人じゃ足りないか？」

「い、いや、私の場合は力がない分、血も少量で済むけど……って、え？」

「じゃ、俺一人で充分だろ」

「ま、待ちなさい！　あなた、本当にそれでいいの？　吸血鬼に血液を捧げるってことよ！？」
「しょうがねえだろ。お前が駄々こねるから」
「駄々なんてこねてっ……！　いや、問題はそこじゃないわ。そんなことして、あなたは大丈夫なの？」
「大丈夫大丈夫。俺、これでも中尉だぜ？」
「地位の問題じゃないでしょ！」
「いちいちうるさいなー。何が不満なんだよ」
「別に不満とかじゃないけど……」

納得のいかない少女。だが相手をしていても不毛なので、フランシスはさっさと次の会話に移った。

「そういえば、お前の名前は？」
「え……何で？」
「なんでって、これから一緒に暮らすのに名前を知らないと不便だろ」
「ああ、そっか」
少女は、呆けたように何度も頷いて、

「……でも、人に名前を聞く時は自分から名乗るものじゃなくて？」

そして少女はやっと安心して落ち着きを取り戻したのか、フランシスを茶化す余裕を見せてきた。『スリ師の癖に何言ってやがる』と言ってやりたかったが、ここは空気を読んで自分から名前を言う。

「俺は、フランシス＝フルート。中尉をやってる」
「じゃあ、『フラン』でいいわね。私は、ルーナ＝ローレンス。吸血鬼をやってるわ」
知ってるよ、と突っ込みを入れながら、ルーナに再び布をかぶせてやる。

「ほら、行くぞ。朝市の時間も終わるころだし、人も少ないはずだ」
わかった、と軽くうなずいて、ルーナは彼の手を握った。

「……ふふ、離さないでね？」
「お前、すっかり調子が良くなったみたいだなぁ……」

さっきまでの泣き顔の面影が全くないくらいの変わり身に若干呆れながら、フランシスは自宅へと歩き始めた。

## 物騒な噂（後書き）

つい長く書いてしまいました。
でも、なんとこれ、見切り発車なんです！（ドーン
はい、すいません…相変わらず見切り発車なんです。
でも見切り発車で３０部以上いってる小説もあるわけですし…楽しんでいただけたら何よりです。

## 引っ越しの準備

……しばらく家に置くとは言ったものの、何の準備もしていない。見切り発車だ。それに、しばらくと言ってもいつまで置いておくかも決めていない。このまま一生家に住みつかれても困る。かといって『やっぱりなし』というのは酷だ。

フランシスは、まだ握ったままの手を確かめながら、考えていた。

これは、多分自分なりの罪滅ぼしのつもりだったのだ。吸血鬼の居場所を奪ってしまったことの。だからあんなことを言ってしまった。言ってしまったからには、これから毎日、教会と（軍人なのに）軍に怯える毎日を送らなければならない。

……今更後悔しても遅い、とにかくこの爆弾のような少女、ルーナの面倒をしばらく見るほかないのだ。

「……ねえ、やっぱり後悔してるんでしょ？　私、スラム街でも何とか頑張って暮らしていけるし、無理はしなくても大丈夫よ？」

「後悔も無理もしてねーよ。さっきから泣いたり茶化したり心配したり忙しい奴だな。怪しまれるからとっとと家に入るぞ」

こんな少女に心を見透かされたというのが、少し悔しい。そう思いながら、足を速める。……そういえば、少女少女と言ってはいるが、実年齢は何歳なのだろう？　外見は１４，５歳に見えるから、その頃に死んだか、吸血鬼に噛まれるかしたのだろうが。

……別に気にすることではないのだが、ふと疑問に思った。先ほどの会話から気まずかった空気の解消ということもあり、ひとまず訊

いてみることにした。

「ルーナってさ、吸血鬼になってからも含めて何歳になるんだ？」
「え？　吸血鬼になってから年なんていちいち数えてないけど……だいたい３０歳くらいかしら」

まだ人間として充分な年齢に、謎の安心感を感じた。それでも、自分よりも年上というのが、彼は少し気に入らなかった。ちなみに、フランシスは今年で２４になる。この年で中尉というのは珍しい。

「ねえ、まだつかないの？」
「もう少しだ」
「手が疲れてきた……」
「ええい面倒な奴だなお前は自分から握っておきながら！」
「ちょっ、大きな声出さないでよ」
「大丈夫だ。この時間、この辺りに人は来ない。朝市が終わって、みんな家でゆっくりしてるのさ」
「ふーん……？」

スラム街から１０分ほど歩いて、市場を通り、広場を抜け、住宅街まで来た。フランシスの言うとおり、あたりには誰もいない。周りの家から少しだけ声が漏れることがある程度で、とても静かだ。フランシスの家は、この住宅街にある。

だが。
彼は知らなかった。彼の最も恐れる人物が、すぐ近くにいることに。

「あ、でも、あそこに人が歩いてるわよ」
「本当だ。……バレないように気をつけろよ」
「分かってる」

その人物は、ゆっくりと歩いている。それに合わせ、彼らもゆっくり歩く。歩きながらもこっそりと注視していたため、フランシスは真っ先に気付いた。その人物が誰かを。

「げっ……！！　フラジール准将……！」
「ん？　フランじゃないか……って、人の顔見て『げっ』とはどういうことだ？　喧嘩売ってんのか」

その人物は、明らかに不機嫌そうにフランシスを睨んだ。乱暴な言葉を使ってはいるが、彼女の名前はヴィクトリア＝フォン＝フラジール、列記とした貴族生まれの女性。だが彼女は軍人、それも多くの部下から恐れられる鬼将軍なのだ。もちろんフランシスもその例外ではなく、この将軍には何度も泣かされている。

成人男性のフランシスと変わらない高い身長を持ち、軍用コートを着て、さらには腰に物々しい大剣を差している彼女は、後ろから見ると男のようにも見える。だが同時に、たなびく長い金髪と凛とした透き通るような蒼い目を持つ彼女は、本物の貴族も憧れる程の色気と気品があった。

フラジールという名は『儚い』という意味を持っているのだが、苗字とはいえ冗談ではないと、フランシスは彼女の名を口にする度に思っている。彼女は、儚いなどという言葉からは最も遠く離れた人物だ。むしろ、仁王のような雰囲気さえ感じる。
だが、当然そんなことを口にすれば斬り伏せられるのも覚悟しなければならないため、いつものことだがそれは言わない。

「えぇーと……いえ、断じて喧嘩を売ってる訳ではありません」
「ならなんだというんだ？」
フラジールが、フランシスとその横で怯えている少女を交互に見る。
……そして、突然顔をにやつかせた。フランシスは、また出そうになる溜息を抑えて、生唾を飲み込んだ。
……この人がこういう顔になった時は、絶対にろくな目に合わない。
彼の経験則だった。

「ああなるほど、デートの邪魔をされたからか？　それはすまなかった。だが、それにしては彼女の服は随分とみすぼらしいな」
「いや……あの、はい、まあ、そうですね。これから服屋にでも行こうかと」
「スラム街の幼い子供を彼女にするとは、よっぽど変な性癖を持っているんだな」
「あ、あはははは……そうですねぇ、私もそう思います。ではこれにて――」

早めにこの場を去ろうとした時、肩を思い切り掴まれた。女性とは思えぬほどの力で、フランシスを引き寄せる。

「まあ、待てよフラン。せっかく休日の日に会ったんだ、久しぶりにゆっくりと話しあおうじゃないか。その彼女さんの事もふくめて、な？」

言葉だけ聞くと、ルーナへの嫉妬ともとれなくもないが、当然断じて違う。フラジールは、たぶんもうほとんど察してしまっているのだ。ルーナが何者かというのを。
どんどんと彼女の顔がフランシスに近づいていく。じっくりと尋問をされているように。

「いえ……あの、せっかくの休日ですし、ね？　お互いゆっくり、親しい人と過ごすこととしましょう」
「ほう、それは未だ独身の私に対する嫌味と受け取っていいのか？」
「め、滅相もない……！」
じりじりと迫るフラジール。たじろぐフランシス。
それを傍観するルーナ。どうしていいか分からず、おろおろしている。

「と、ところで准将は、何故わざわざこんな辺鄙なところに？」
「その辺鄙なところに住んでるからさ。悪いなぁ、辺鄙なところで」
「は、ははは……そうなんですか」

もう愛想笑いも崩れそうになりながら、無理やり顔を保つ。准将というからには、街の中心の方に住んでいるとばかり思い込んでいた。

フランシスもここに住んでいるのだが、フラジールがすぐ近くに住んでいるなど少しも知らなかった。へりくだったつもりが、さらに失礼なことを言ってしまったことになる。言うこと言うこと全てが、裏目に出てしまう気がした。

「い、行きましょ、フラン！　私、早くお茶が飲みたいの！」
「ほう、お嬢さん茶が好きなのかい？　飲みたいのは、本当にただの茶なのかな……？　そういえばその布も被り方が変だな。その布をとって、堂々と可愛い顔を見せればいいじゃないか」
「じゅ、准将。准将のお察しどおり、この子はスラム街の子です。あまり事情は聞かないでやってください」

今までフランシスが必死に話題を逸らしていたのが、すべて台無しになる。ルーナは自分なりに助け船を出してくれたつもりなのだろうが、逆効果だった。フラジールの目線が再びルーナへと移る。

「まあ、あまり苛めるのも芸が無い。このへんにしといてやろう。そこのお嬢さんも、化け物ではなさそうだし？」
「はは、では私たちはこれで……」
「なぁフラン」

やっと解放される、と思った矢先に、呼びとめられた。歩みを止め、返事も忘れて、ゆっくりと彼女の方を向く。

「――化け物になったお前達を斬る準備はできているぞ？」

彼女の含み笑いの下で、剣が光った気がした。

フラジールが、吸血鬼弾圧派でなくてよかったと心から思う。この厳格な将軍の前では、お人好しの彼でも心変わりしたかもしれない。彼女が言いたいことは要するに、『吸血鬼だろうと大人しくしているなら見逃すが、フランシスを吸血鬼にするようなら双方容赦はしない』ということだ。

彼女は、弾圧派ではない。だが軍人が吸血鬼になったというのなら、話は別。吸血鬼は軍人になれず、軍人が吸血鬼になれば問答無用で処刑されるからだ。

この少女を背負う重みを改めて感じさせられたフランシスは、朝だというのに汗だくになりながら再び歩き始めた。

そして、それから2，3分で自宅へとたどり着いた。フラジール准将に会って精神を著しく擦り減らしたフランシスには、それでも長すぎる距離に感じた。

「ついたぞ。ここだ」

ルーナを中に入れる。そして、自分も椅子に座って、また大きく溜息をついた。ルーナを見やると、猫のようにあちこちを動き回っている。とは言っても小さい家だ、すぐに終わるだろうと放置して、

椅子の上でしばらく落ちつくことにした。
予想通り、ルーナはすぐに帰ってきた。

「……中尉って割には小さい家ね」
「我慢しろ。一人暮らしなんだからこれくらいでちょうどいいんだ」

ここで、フランシスは気付いた。

今まで一人暮らしをしていたものだから、ほとんどの物が一人分しかないことに。食料は相手が吸血鬼だから問題ないとして、服だ。フランシスが独り身であることは市場の市民には知られているし、女物の服など買ってはまた騒がれるに決まっている。
……それに、ベッドも一つしかない。

「なぁ、ルーナ」
「何？」
「俺とお前でベッド一つじゃ駄目かな」
「駄目に決まってるでしょバカッ！」

まあ当然の反応だ。というか、そんなことになったらフランシスもどうしていいかわからない。
しかし、ベッドを買うとなったらこれはもう服どころの騒ぎではない。服なら女へのプレゼントで誤魔化せるが、ベッドをプレゼントする者は中々いない。誰もが、誰かと同棲するものと思うだろう。
病気の母が越してきたから、とでも言い訳しておくかと彼は一瞬考えたが、誰かが見舞いに来ても面倒だ、とその考えを消した。
いくらこの家の持ち主がフランシスだからと言って、自分がベッドの上で寝て、年端もいかぬ少女を床で寝かすのはあらゆる意味で問

題がある。しばらくは自分が床の上で寝るしかないだろう。
ベッドの方はしばらくそれで我慢するとして、やはり服が必要だ。

「しばらくここでくつろいでてくれ。ちょっとお前の服買ってくる」
「ま、待ってよ。自分の服くらい自分で買いたいわ」
「……お前な、ここまでは上手くいったが、外に出ることがどんだけハイリスクか分かってんのか？　ただ服買うだけだぞ？　我慢しろ」
「わ、私だって女よ。お洒落したいじゃない！」
「分かった分かった。じゃあリクエストしろよ。できるだけそれに沿った服選ぶから」
「えー、私が選びたい……リクエストなんかじゃ、うまく伝わらないだろうし」

スラム街から出た途端わがままを言い出したのは、ただ単に甘えているわけではないだろう。おそらくは、スラム街に住んでいたことで眠っていた吸血鬼としての習性もあるはずだ。吸血鬼になると貴族精神がつき、プライドが高くなるうえ、高級品・嗜好品を欲しがるようになるらしい。
そんな話を思い出したフランシスは、今日何度目になるか分からない溜息をついた。

「わがまま言うな。できるだけ妙な噂は避けたいんだ。……本当なら、服を買うのだって避けたいが？　それじゃあお前が気の毒だと思って買うって言ってるんだからな」
「……分かったわよ。でも、なんて誤魔化すつもり？」

「女へのプレゼントってのが一番簡単だな。さ、リクエストがあるなら早めに言ってくれ」

「わかったわ。えーと、黒でゴシック調のレースフリル付きドレスをお願い」

「……聞くだけで高そうだな」

「いいじゃない。女性にプレゼントするんだからそれくらいしなきゃ、ね？」

「こいつ、そのために誤魔化す方法を訊いたのか……」

プライドがあるにしては、随分と汚いやり方だ。というか、もう少し遠慮をしろ。そう思ったが、細かく言うのは諦めて大人しく買いに行くことにした。

「あ、ちょっと待ってフラン！」

だが、玄関の扉に手をかけたところで、ルーナに呼び止められた。フランシスが振り向くと、彼女は少し言い辛そうに目をそらしていた。

「……先に血を吸わせてくれないかしら。そろそろ血を補給しないとまずいのよ……」

「でも、体に吸血鬼の牙の痕を残して買い物に出かけるわけにはいかないだろう？」

「それは、そうだけど……」

「さっきも言ったが、できるだけ騒ぎは起こしたくないし、リスクはなるべく低くするべきだ。早めに帰ってくるから我慢してくれ」

「まあ、そうね……。こちらは居候の身なのだから」

それにしては随分と高価な物を頼むじゃないかと言ってやりたかったが、今言っても仕方ないので抑え、そのまま家の外に出ることにした。

今度は人がちらほらと見えるが、全くそれを気にすることはない。ここに来て彼は、今日初めての安堵の息を漏らした。家の前で誰かに話しかけられても面倒だと考え、しっかりと施錠をしてから足早に歩いた。

服を買ってくると言ったものの、フランシスはほとんど服など買わないし、ましてや高級な服を売る店など見たことすらない。……店を見つけるためには、人に訊かねばならない。高級なドレスを売る店を探したとなれば、これも噂になることは必須だろう。

……だが、吸血鬼一人を家に置いているのだから、それくらいの噂はいかに隠しても必ず出てくる。それなら、下手に隠すより女の匂いをまとわせておいた方が、むしろカモフラージュになるのではないか？　あれこれ悩んでも仕方がないため、そう考えることにした。

そして、何度か道を訊きながらようやく服屋に辿りついた。訊くたび訊くたびに、人からにやにやと笑われたのは、言うまでもない。改めて、服屋を見る。まるで縮小した城のような高級感溢れる外観は、見るだけで帰りたくなる。場違いにもほどがある、とフランシスは呟く。そして、看板には、『ｒｏｙａｌ　ｈｏｕｓｅ』と厳かな文字で彫られている。高級服を売っているといっても一介の店に過ぎないというのに、『王家』などと銘打って果たしていいのだろうか、などと、意味もなくこの店にケチをつけた。

なんとなく緊張しながら中に入ると、当たり前だが中にはたくさんの服が置かれていた。フランシスは服屋など行っても小さな店くらいだったものだから、たくさんの服が並んでいるという状況をあまり見ない。……そして、目を背けたくなるような値段も、あまり見ない。

だが、入ったからにはもう買ってしまおうと思い、服を探す。黒い服はさほど多くない。その中にレースフリルのドレスなどあるのだろうか、と、心配なのか希望なのか彼自身分からない気持ちでいたのだが、実際のところそれはあった。すぐに見つかった。

黒が基調のゴシック調で、ふわふわとしたフリルが幾重にも付いている（フランシスには邪魔にしか見えないのだが）。貴族のお嬢様が着ているような服だ。ルーナがこれを着れば、つい先ほどまでスラム街でスリをしていたとは誰も思わないだろう。

もちろん、これも他とは違わず信じられないほど高価だ。

だが、できるだけ高級なものの方が、かえって好きな女へのプレゼントと見なされリスクは少なくなるはず……。少女にうまく言い包められたのを否定するように、そう何度も頭の中で思い続けた。

カウンターの方を見る。そこで立っているのは、二十代後半といったくらいの女性だった。……女性は色恋沙汰に敏感だ。多少面倒に思いつつも、ルーナも待っていることだろうからその女性を呼んだ。

「店主、この服をくれ」

「はい、かしこまりまし……あら？　あなたはもしや、フルート中尉ではありませんか」

「え、俺を知ってるのか？」
「はい。たまに市場で見かけます。軍人としては珍しく市場の皆さんと仲良く話してらしたので、覚えていたのです」
どうやら、こんなフランシスとは無縁な高級服店で働いている人でも、彼の名は知っているらしい。彼としては、なんだかむず痒い感覚がした。

「このようなドレスを買ってもらえるなんて、中尉の彼女さんは幸せ者ですわね」
そう茶化されても、苦笑いをするしかなかった。

プレゼント用として包まれた箱を抱えながら店を出て、再び街中を歩く。早めに帰ると言ったが、結局遅くなってしまった。もう一、二時間は経っている。ルーナもさぞ退屈していることだろう。彼は、そう考えながら足を速めた。

だが彼は、すっかり忘れていたのだ。

力のない吸血鬼が血を吸わずにいると、どうなると言っていたかを。

## 引っ越しの準備（後書き）

フラジール准将の方が、ルーナよりも描写が細かい気がする。

……趣味全開ですね、私。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1909ba/

---

スラム街の吸血鬼

2012年1月6日17時46分発行